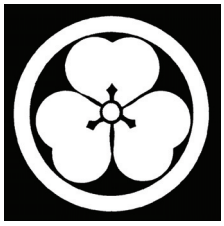


山田家調査報告

江戸山下町

二〇〇五年三月

目次

山田家調査概要 4
予備調査 4
山田家系図 5
山田氏の分布状況 5
山田氏の家紋 5
新潟県に関する文献 6
現地調査 7
称行寺過去帳 8
江戸山下町 8
青山霊園の墓地 8
口伝について 9
源兵衛の人物像 9
藩政時代の新潟 10
通行手形について 10
山賊について 11
経済的背景 12
新潟県の山田氏 12
山田保の家系 12
山田保家の調査 13
浄会寺の過去帳 14
大瀦郷新田開発 15
当家と山田保家の関係 16
通名 16
経済的背景 17
苗字帯刀を許される 17
通行手形を得る 17
菩提寺の場所 17
架橋に携わる 18
学問に通じた家 18
家紋について 18
総括 19
調査地一覧 20

調査協力 22
付録 23
上越の快男児山田保 23
山田君碑 ―五智国分寺― 30
参考文献リスト 32

山田家調査概要

山田家は、幕末頃から江戸山下町（現東京都中央区銀座五丁目一～二番・六丁目二～四番）に居住しました。

当家の口伝によれば、初代源兵衛は越後国（新潟県）から江戸（東京中心部）にのぼった町人で、当時口入れ稼業[壱]を営み、何らかの功績が認められ苗字帯刀を許されていたといわれています。また、二代目源兵衛は養子で、先見の明があったらしく、現在の銀座から江東区にかけて、土地家屋を広く入手し今日の礎を築いたといわれています。

明治以降の山田家については、親族の方が情報を収集し家系図にまとめてありました。しかし、明治期以前の由緒については、前述の口伝のほか、詳細は何も伝えられていません。

本調査は、当家の世系を明治期以前まで遡り明らかにすることを目的とし、越後から江戸へ来たという口伝を手がかりに広範な調査を行いました。

その結果、越後国頸城（くびき）郡大潅（おおぶけ）郷上増田新田（新潟県上越市頸城区上増田）の觸元大肝煎（ふれもとおおきもいり）[弐]という村役を務めた山田氏に関係がある可能性が浮上しました。

予備調査

除籍謄本によれば、当家の本籍地は東京市京橋區元数寄屋町（中央区銀座）となっています。一般に都心部の家系調査は簡単ではありません。江戸は、当時から世界屈指の大都会で、大名・旗本や、その家臣と家族をはじめ、浪人、商工職人など、地方から流入した者が多数集まっており、長年同じ土地に定住した農村地方と状況が異なります。

更に、関東大震災や東京大空襲で、二度にわたり壊滅的な被害を受けており、その都度記録が失われました。

それ故、系図がその家にとって重要で、大事に保存してきた大名、旗本のような士族階級や、幸運にも記録が失われず残されてきた家でない限り、家系を遡り調査するのが難しいのです。

壱 人材斡旋業。身分の不確かな者の保証人となり、職場を斡旋、稼ぎの一部を身元保証料として徴収するのが本職だが、豪商の娘の嫁入り先を世話するなど、いわば便利屋的存在でもあった。

弐 大肝煎は、領主の命令を各村々の庄屋に伝え、村から徴収した年貢をまとめて領主に上納した。また、村内だけでは対応できない紛争や村同士の問題の処理などにもあたった。觸元はその元締め。

それ故、実際にどこまで調査が進められるか見極める必要があり、現地調査に先駆けて予備調査を実施しました。

山田家系図

別紙「山田家系図②」は、除籍謄本の記載事項、過去帳・石塔の記録を基本にして作成しましたが、更にご親族の方が作成した家系図に詳しく書かれていた事項を加え、一枚にまとめました。

山田氏の分布状況

山田家の出身地域を推定する上で、電話帳のデータから山田氏の分布状況を調べました。

日本人の姓はおよそ三十万種類といわれますが、山田姓は第一位の佐藤から数えて第三十三位にランクされる大姓です。

山田姓の家は、日本全国で八万五千二百二件に上り、新潟県では千五百三十五件あります。その大半が、中越（新潟県中部）地方から上越（新潟県西部）地方に集まっており、さらに県境を越え長野県北部にも分布が見られます。

当家の口伝は、越後から江戸にきたという漠然としたものですので、分布の見られる地域は全て調査対象になります。しかし、新潟県はたいへん面積が広く、千五百三十五件の全ての家を調べることはできません。

本調査では、当該地域に五件以上山田姓の家が分布していることを目安に、その密度や地域性を考慮にいれ、調査地を絞りました。

山田氏の家紋

当家の家紋は、「丸に片喰」です。家紋は、氏の繋がりを示す重要な手がかりになります。

当家の菩提寺称行寺の墓地には、山田一族の石塔がありますが「丸に片喰」を使う山田氏の墓が八箇所ありました。

山田家墓地　- 称行寺 -

姓氏家系大辞典[参]では、山田氏が三十三項目にわたって紹介されています。十六項には清和源氏川田氏流（満政流）の記載がありますが、この氏は尾張国（愛知県）の旧家であり片喰紋を用いています。他にも、下総国（千葉県北部）山田郡発祥の新田氏流、幕臣の山田将監も片喰紋を用いています。

寛政重修諸家譜[四]にも前述の清和源氏満政流の山田氏があり、片喰紋を用いています。

都道府県別姓氏家紋大事典[伍]東日本編では、新潟県の項に山田氏の使用紋のひとつに片喰紋をあげ清和源氏満政流と記載されています。

しかし、実際調査してみると新潟県には片喰紋を用いる山田家はほとんど存在せず、これらの文献の内容はそれほど参考になりません。

新潟県に関する文献

国立国会図書館東京本館で、新潟県を中心に日本姓氏歴史人物大辞典[六]、越佐人物誌[七]など、氏や人物に関する資料を調べました。

越佐人物誌では、頸城郡頸城村上増田新田（上越市頸城区上増田）の大肝煎（おおきもいり）山田保に注目しました。山田保は、源平和保の長男とあり、高田藩主松平光長の時代に中谷内、大潟両新田開発をした平石彦左衛門に協力した旧家で、大肝煎を務めた豪農でした。

保は、明治四年、直江津の荒川大橋架橋に努力し、保の山林から杉材三百本を無償で供出し、大橋を完成させた功労者として、地元ではよく知られています。

保の父源平和保の字（あざな）が、当家の先祖源兵衛と酷似していることから、上越地方の調査では、とくにこの家を中心に調べることになりました。

一方、長野県の文献も無視できない存在でした。

戦国期に、信濃の豪族は武田信玄の侵攻により、滅びたものや領地を追われ、越後の上杉謙信を頼ったものがあります。

また、北国（ほっこく）街道は信濃追分[八]

越後に落ちた信濃の武将、村上義清の葛尾城跡
- 長野県埴科郡坂城町 -

参 太田亮著 角川書店 日本最大の姓氏関連の辞典
四 堀田正敦等編 続群書類従完成会 江戸幕府が編纂した大名・旗本の系譜集
伍 千鹿野茂著 柏書房
六 姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編著 角川書店
七 牧田利平編 野島出版

八 長野県北佐久郡軽井沢町大字追分

まで南下し、中仙道に通じていたので、越後と信濃の間では、街道に沿って人々の往来があったと考えられます。

長野県北部で文献に載っていた山田氏の一つに、清和源氏義光流の山田親義があります。松本市教育委員会によると、山田親義の屋敷跡は松本市山田地区の山田神社周辺にあり、この氏は木曽義仲の滅亡とともに滅びたといわれています。寛政重修諸家譜には、この山田氏に連なる系譜が記され、家紋は三本扇となっています。

山田神社　- 松本市山田地区 -

現地調査

現地調査は、東京をはじめ、新潟・長野両県で行いました。調査の目的は、初代源兵衛が新潟から来たという口伝をもとに、その出身地と出自を明らかにすることです。

調査は六次にわたりましたが、その期間と調査地は次に示すとおりです。

第一次　二〇〇四年六月六日～九日
長野県　松本市・長野市
新潟県　上越市・妙高市

第二次　二〇〇四年七月三日～六日
新潟県　十日町市・見附市・三条市・燕市
新潟市・新発田市

第三次　二〇〇四年十月十六日～十八日
長野県　長野市・中野市
新潟県　上越市

第四次　二〇〇四年十一月二十七日～二十九日
新潟県　上越市・妙高市
長野県　長野市

第五次　二〇〇五年一月十八日
東京都　台東区

第六次　二〇〇五年一月二十五日
東京都　台東区

称行寺過去帳

当家菩提寺、叡龍山称行寺住職佐々木厳乗先生にご協力いただき、当家に関わる過去帳の記録を調べていただきました。

過去帳によれば、初代源兵衛は安政三（一八五六）年九月二十九日没、行年八十歳となっており、行年から計算して源兵衛の生年は安永五（一七七六）年と思われます。

源兵衛が江戸へ出て来た時期は定かでありませんが、死亡した子供の年齢などから推測して、文化年間（一八〇四～一八一八）頃ではないかと思われます。

過去帳には、屋号大和屋、山下町または山下御門前とも書かれており、当時、その町に居住し、大和屋の屋号で呼ばれていたことがわかります。

過去帳の内容は、本書巻末「山田家過去帳」に掲載しました。

上野山称行寺　- 台東区東上野 -

江戸山下町

山下町は、江戸城山下門外（現行の千代田区内幸町と有楽町の境付近）にあったことにより名づけられました。現在の中央区銀座五丁目一～二番・六丁目二～四番にあたり、ちょうど阪急百貨店や泰明小学校から数寄屋ビルあたりまでの一角を指します。

江戸山下町　- 江戸切絵図と現在の地図 -

青山霊園の墓地

青山霊園には、当家の二代目源兵衛髻（もとどり）塚、本家の孫右衛門の墓地（丙十号八十八側十番）があります。

髻とは武士が結っていた「ちょんまげ」のことで、当家は幕末には苗字帯刀を許されており士族格であったことから、明治維新を迎えるにあたり髻を切って、旧時代に決別したのだと思われます。

木戸孝允ら明治新政府の首脳は、明治四年八月散髪脱刀勝手令を発布し、日本近代化のために断髪を奨めましたが、当時民衆の抵抗が強く、断髪離婚や死人がでるなど、ちょんまげ騒動が起こりました。

散髪脱刀勝手令は、現代人からは想像できないほどの自己変革を強いられるものだったのです。

源兵衛髻塚　- 青山霊園 -

口伝について

源兵衛の人物像

初代源兵衛は、安政三（一八五九）年の生まれですが、源兵衛の子供の没年から考えると晩婚で、おそらく江戸に出てから結婚したと思われます。

また、早世した子供を称行寺できちんと供養し、二代目に養子を迎え源兵衛を襲名させています。

このような行いから、初代源兵衛は分別のある落ち着いた人物像が浮かびます。江戸へ出て来た動機は、若者の無鉄砲から一旗上げようというようなことではなく、何らかの目的があったものと考えられます。

また、青山墓地には、二代目源兵衛の髻塚が建てられていました。源兵衛は苗字帯刀を許されていたといいますから、武士としての気概をもって生きてきたものと思われます。

藩政時代の新潟

初代源兵衛は越後から江戸に出てきたといわれています。しかし、越後国は南北に広く、源兵衛はどの地方から出てきたのか、わかっていません。

現在新潟といえば、県庁所在地である新潟市を中心に考えますが、江戸時代の新潟は、新潟湊を中心として発達した湊町であり、北国浜街道の宿場町でもありました。もともと長岡藩領でしたが、天保十四（一八四三）年から幕府領に上知[九]されています。

戦国期に越後を治めた上杉謙信は、春日山城（上越市）を居城としました。

春日山城は南北朝動乱期の築城といわれますが、上杉氏は豊臣秀吉に会津国替えを命じられるまでの二五〇年間、ここで越後の領国経営を行い、まさに越後の中心地でした。　上越は、その後高田藩領となっています。

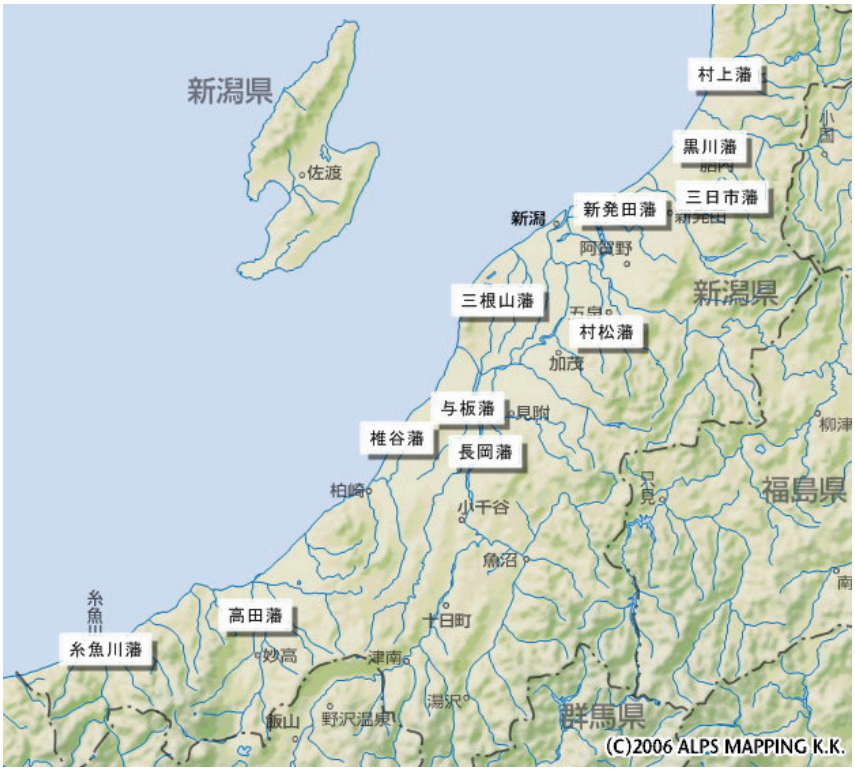
春日山城城址　- 上越市 -

九　幕府が大名・旗本・御家人から、それぞれの知行地を没収すること。

【江戸後期・越後国内の各藩】

● 村上藩
● 黒川藩
● 三日市藩
● 新発田藩

村上市
胎内市黒川
新発田市三日市
新発田市周辺



江戸後期・越後国内の各藩

● 三根山藩	新潟市巻
● 村松藩	五泉市村松
● 与板藩	長岡市与板町
● 長岡藩	長岡市周辺
● 椎谷藩	柏崎市椎谷
● 高田藩	上越市周辺
● 糸魚川藩	糸魚川市周辺

通行手形について

江戸時代、庶民に通行の自由はなく、旅行はすべて許可が必要でした。

関所では、「入り鉄砲・出女」といい、江戸在住の大名の妻が密かに領国へ帰国することと、江戸への鉄砲の流入が、幕府によって厳重に規制されました。

また、藩経済の基礎である農民は領国外へ出ることは許されませんでした。関所破りは重罪であり磔刑に処せられました。

初代源兵衛の家は、少なくとも通行手形を得ることができる家格を有していたことになります

通行手形は村役人または村の菩提寺から発行されましたが、伊勢や善光寺参りなど宗教上の理由がある場合は概ね許可されたようです。

通行手形には、持参人の身元、旅行の目的、関所通過の要請、関係諸官への便宜・保護要請、発行者の身分所在地等、などが記載されていました。

北国街道 関川の関所跡　- 妙高市関川 -

山賊について

初代源兵衛は、山賊に襲われ命からがら江戸まで辿り着いたといわれています。

当時、高田藩領から江戸までの交通路は、北国街道を信濃追分まで南下し、中仙道を経由することが考えられます。

長岡藩領からは三国峠を越えてやはり中山道に合流することになります。

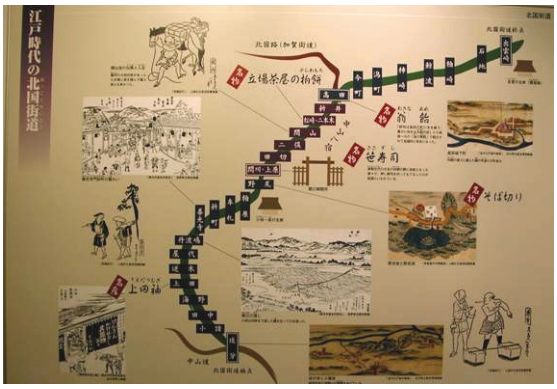
中仙道は幕府直轄の五街道のひとつで、宿駅などが整備されており、往来する人もかなり多いと思われます。

山間を通過するところで、山賊がでることは十分考えられますが、どちらのルートも山間は領国に近く、山賊に会い無一文になった源兵衛が、そのまま街道を江戸までのぼったかどうかは定かではありません。

引き返して出直したことも考えられ、後世に盗賊に襲われた話だけが残った可能性もあります。また、襲われた付近の村から人を走らせ、故郷から旅費を都合することも考えられます。

経済的背景

山賊に襲われ無一文となった源兵衛が、江戸までたどり着き、裸一貫から身代を起こしたという話は、にわかに考えにくいことです。



江戸時代の北国街道　- 妙高市 道の歴史館 -

一般的に、短期的になした財産は、同様に散財する傾向があります。今日の山田家の長期的な発展を見れば、故郷にしっかりした経済的後ろ盾があったのではないかと考えられます。

また、初代源兵衛は、子が早世し養子をむかえていますが、家督を継がせる必要があって養子をとったと思われます。

二代目源兵衛に至っては、家屋敷に投資し、今日の基礎をつくりましたが、二代目源兵衛には、はじめから投資する才覚が備わっていたと思われます。

新潟県の山田氏

予備調査で作成した山田姓の分布図をもとに、新潟県内を調査しました。その結果、今日では由緒の伝えられる山田氏の旧家は、ほとんど見つけることができませんでした。

しかし、当家と関係がある可能性のある家として、上越市頸城の豪農山田保の家が浮上しました。

山田保の父は、源平和保といい、字（あざな）が当家初代源兵衛と同じ読みでした。生存年代もほぼ一致し、はじめは、同一人物ではないかと思いましたが、過去帳の記録から全く別人であることが判明しました。

しかし、調べて行くうちに、この家と当家の間に共通点が多く、その関わりが無視できない存在となっています。

山田保の家系

山田保については新潟県のいくつかの郷土資料に掲載されています。この資料の一部は本書付録**壱拾**に載せましたが、資料の中で最も古かった「山田保」（栗原惣次郎編　明治四十一年）には、次のように書かれ、系図も紹介されていました。

山田家は北越の奮家たりき。祖先を川田奥右衛門信安となす。信安、慶安三（一六五〇）年信濃國に生れ、後浪士となりて、天和貞享（一六八一～一六八八）の頃、兄弟三人相携へて越後に來り、中頸城郡中増田村豪農平石彦右衛門方に寄寓し、

成巌寺　- 上越市頸城区日根津 -

壱拾　付録「上越の快男児山田保」参照

當時大總代役たりし平石氏を佐けて村政に與（あずか）り、その餘暇を以て鄉當の士女に讀書習字を教授し、漸（ようや）く人に知られ、後姓を山田と改め、次いで地を上増田村に卜（うつ）して邸宅を設け、以てそこを永住の地と定めき。是れそもそも山田家が太祖にして、山田家の北越に起りし所以（ゆえん）なり。

二代を貞保といふ。信安の末子なり。三代を太郎兵衛といふ。貞保の嫡男なり。當時は山田家の家運未だ振はず、極めて微々たるものたりしが如し。四代を之保といふ。太郎兵衛の弟なり。之保、專心、家政を整理して興産の道を講じ、遂にその晩年に至りて、優に巨萬の富を成すに及べり。蓋（けだ）し之保は山田家中興の祖たり。五代を治保といふ。之保の長子なり。明敏にして大度あり。德を以て四隣の人に推され、家運益盛なるに至れり。六代を和保といふ。治保の長子なり。能く産を守りて家門を辱めず、自ら北越の名門たる格を成しき。加ふるに和保の叔父に保國といふあり。謹嚴剛直、觸元役（ふれもと）**壱拾壱**に居る三十九年。屡（しばしば）、藩公に賞賜せられ、實に山田家最近に出でたる偉材にして、而して源山田家にとりては四代之保と共に其の功最も多きに居る人なり。要之、山田家は太祖信安に起りてより二百有餘年誠に連綿たる家系を存せるなり。而してわが山田保は實に七代目の當主たりけるなり。

壱拾壱　大肝煎の元締め

山田保家の調査

上越市の郷土資料には、保の遺言により、保の墓は頸城区日根津（ひねづ）にある曹洞宗の寺院、成巌寺に埋葬されたことが書かれています。

さっそく、この寺を訪ね墓所まで行ってみました。ところが、墓は確かにそこにありましたが、山田保の家はこの寺院の檀家ではありませんでした。

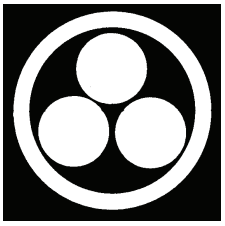
電話帳のデータでは、現在上増田地区に山田姓の家は五件あります。この中に、山田保と縁続きの家がある可能性があり、家々を訪問し保のことを尋ねました。

その結果、現在はこの地区に山田保の家はなく、この地区にある山田家の人々も、どの家が縁続きにあたるのか、明確にはわかりませんでした。

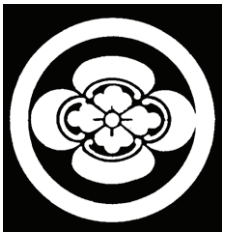
ただ、この地の山田氏は家紋が二種類あり、それぞれ「丸に三つ星」「丸に木瓜」であることが判明し、保の家は前者を用いたことがわかりました。

山田保墓　- 日根津成巌寺 -

更に、上増田地区にある寺院成願寺（真宗大谷派）住職渡辺（ひがの）宗全氏に尋ねてみたところ、山田保の菩提寺は頸城区宮本の浄会寺であることが判明しました。



丸に三つ星



丸に木瓜

浄会寺の過去帳

浄会寺は浄土真宗本願寺派の寺院で、上増田から西方約四㎞の宮本地区にあります。住職佐藤親善氏にお聞きしたところ、ここが山田保の菩提寺に間違いなく、山田保家の過去帳が現存していることがわかりました。

この過去帳はきれいに整理して書かれたもので、住職の許可を得て拝見することができまし

浄会寺　- 上越市頸城区宮本 -

書院　- 浄会寺 -

た。

寺には本堂に隣接して、山田保の寄進による書院が建てられており、百年以上経過した今なお使われています。寺の記録によれば、この書院は、山田保の分家山田逸八の作であり、中尊前の法輪灯等真鍮仏具は同じく太郎左衛門の寄進であると書かれています。

また、佐藤住職の記憶により、上増田ＪＡ給油所裏の林の中に山田一族の旧墓地があると聞き、行って調べてみると、現在は無縁になり放置されているものの、確かに石塔が残されているのが確認できました。

新潟県人物百年史頸城編「山田保」**壱拾弐**によると、山田保の子省吾は北海道に移住し、その後省吾の次男で跡を継いだ正夫が、和歌山県御坊市に居ることがわかっていたようですが、お寺では現在保の子孫とは音信不通になっているといいます。

真鍮仏具　- 浄会寺 -

壱拾弐　新潟県上越人物史研究会編　東京法令出版

山田一族旧墓地　- 上越市頸城区上増田 -

大瀁郷新田開発

大瀁（おおぶけ）郷は、高田藩主松平光長の治世に、新田開発によって新たに生まれた郷名です。開発の功労者神戸（かんべ）三郎左衛門が命名したとされています。

この新田開発には、上小町（本町四丁目）に居住した豪商宮嶋作右衛門（初代）が中心的にかかわり、上野国（こうづけのくに）（群馬県）で浪人していた、平石彦左衛門・神戸三郎左衛門・茂田七右衛門らを招聘しました。

平石らは浪人でしたが、もともと家柄が良く新田開発や用水開削に見識のある技術者でした。

上野国に流入した浪人には、戦国期には武田信玄のもと甲州流と呼ばれ、治山治水、鉱山開発に優れた土木技術をもったものが多く、武田家滅亡後、主家を失ったため、上野国に移り住んでいました。

新田開発の結果、新田村が百村生まれましたが、そのうち無民戸又は

古村の枝村が五十村ありました。この村々を形成して農業に従事した農民人口は、古村の耕地拡大を割り引いても、一万人近く必要となったと考えられます。

山田保の祖先川田奥右衛門信安は、はじめ平石彦左衛門宅に寄寓したといわれていますが、平石彦左衛門は、中谷内や大潟の干拓、新田開発に首班を命じられた人物です。

頸城村史資料編「平石彦左衛門の由緒」によると、同家については次のとおり書かれています。

村上院具平親王十二代、赤松播磨守則景ノ男、上州甘楽郡小幡城主平石山城守十一代目ニ上州碓氷郡上増田村ニ住居、九代目彦左衛門大濱郷神原（かなはら）村へ寛永年中（一六二四～一六四四）ニ移ル
延宝六（一六七八）年中増田新田へ移ル
慶長二（一五九七）酉年生寛文十二（一六七二）子年七月六日病死行年七十六法名麟中道一居士ト号ス大慈院ニ墓アリ
七代目彦左衛門第四男、郡治幼名竹五郎改メ、治左衛門宝暦二（一七五二）申年三月二十三日生レ、百間町新田村川田重右衛門へ養子、明和六（一七六九）丑年十一月婚姻、天保元（一八三〇）年五月二十九日死亡
…中略…
初代平石彦左衛門
慶長弐（一五九七）年出生寛文十二（一六七二）年七月六日病歿。七十六才。法名麟中道一居士。妻は神戸氏。寛永年中上州上増田村より大濱郷神原村へ移住。松平越後守光長に仕へ俸禄二〇〇石。正保三（一六四六）年より延宝六（一六七八）年まで中谷内・大潟八千石余開発成功。神原村より中増田新田へ移り、致仕土着す。越後守より郷士、大濱郷大肝煎を仰付けらる。
二代七郎右衛門
父を助けて新田開発に協力。大肝煎
三代曽左衛門
大潟新田開発の事業進行中、前に寛文十（一六七〇）年十二月六日父七郎左衛門死亡、ついで十二年七月六日祖父彦左衛門もまた病歿。開発事業の全責任は十六才の曽左衛門の肩にかかった。父祖の素志を継ぎ、延宝六年、大潟新田四千八百石余、村数二十四ケ村開発す。六月二十三日功により高田藩より分一米を給さる。

彦左衛門は、上州から来た当時は神原村（上神原新田）へ居住しましたが、中谷内新田の開発が終わると上増田新田に移住しました。上増田の地名は、彦左衛門の生国上野国碓氷郡上増田村の郷名から命名されました。

当家と山田保家の関係

当家と山田保家との間で、関係のある点がいくつかあげられます。

通名

当家は源兵衛の通名を持ち、「源」を通字として用いています。昔は名前を受け継ぐ習慣がありました。

山田保家も六代和保が源平を称しています。「源兵衛」と「源平」は、読みが同じですが、昔は同じ読みを別の漢字で表記することが多く、「兵衛」と「平」同様に扱われていました。

経済的背景

山田保の曽祖父四代藤内郎之保は、家産を整理し興産の道をたて、晩年には巨万の富を蓄え、山田氏中興の祖といわれました。五代治保の代に至って、家運は更に盛んだったといわれています。治保の弟金四郎保国は、謹厳剛直な性格で觸元大肝煎役に命ぜられました。在任中、藩侯にしばしば賞賜されなど、之保とならんで最も功績の多かった人でした。

苗字帯刀を許される

山田保は大叔父保国の後を引き継ぎ、觸元大肝煎役を務め、苗字帯刀を許された家柄であり、藩主に会って献策できるほどの家格を有していました。

当時、高田藩主は徳川家譜代の榊原家で、高田藩で苗字帯刀を許されているものは、江戸でも同様の扱いを受けたと考えられます。

通行手形を得る

当時、高田藩の江戸上屋敷は神田小川町にありました。大名は、参勤交代で隔年に江戸で政務を司りました。觸元大肝煎役は江戸で藩主に会うこともあり、通行手形を得ることは用意であったと考えられます。

菩提寺の場所

山田保の叔父今川定信は江戸元浅草にある勝龍山明成寺の住職でした。今川定信は山田保が海運業に失敗したとき、その解決のため奔走しています。

当家の菩提寺称行寺は、この明成寺から数百メートルの近距離にあり宗派は同じ浄土真宗大谷派です。

真宗大谷派の寺院は、銀座から比較的近い芝や麻布にいくつもありますが、当家の菩提寺が東上野にあることは調査のはじめから疑問でした。

しかし、初代源兵衛が山田保家の縁者なら、江戸で菩提寺を定める際に、明成寺から称行寺への紹介を受けたことは考えられないことではありません。

架橋に携わる

山田保は、直江津に荒川大橋を架けるのに、屋敷内にあった杉材三百本を寄付し貢献しました。地元で人夫を雇い直江津まで運ばせ、自ら先頭にたって架橋工事を指揮したといいます。

一方、当家の仙太郎は、南高橋（中央区湊）架橋の際に貢献しています。南高橋は、大正十二（一九二三）年関東大震災後の復興事業により、当時橋のなかった本湊町と対岸の越前堀一丁目との間に計画されましたが、地震災害により破損した多くの橋を改架したために、予算が乏しくなっていました。東京市は、明治三十八（一九〇五）年に架橋され、地震被災によって改架された両国橋の三連トラス橋のうち、損害の少なかった中央部分を補強し直し、橋幅を縮めて再利用し南高橋を完成させました。そのため奇しくも明治の鉄橋が現代に残ることとなり、全国でも六番目に古い鋼鉄トラス橋として、中央区民有形文化財に指定されています。

南高橋竣工式　- 昭和 7（1932）年 3 月 -

学問に通じた家

山田保は、子供の頃から優秀で、伯父の保国などは、いち早くその才能を見出し、保に学問を教えるのが楽しみでした。高田藩の儒者東条琴台もその才能を評価したといいます。

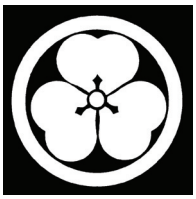
当家にも、先見性に優れた学者や人材が多く出ています。

家紋について

当家の家紋は「丸に片喰」です。新潟県で「丸に片喰」を用いる家はほとんどなく、旧家には見られませんでした。

家紋は、家系を遡る上で重要な要素ですが、新潟県では家ごとに家紋が異なることが多く、本調査ではそれほど重要視していません。

山田保家は「丸に三つ星」を用いており当家とは異なっていますが、片喰も三葉で三つ星とデザインが似ています。



丸に片喰

丸に三つ星

総括

山田家の調査は、はじめから困難が予想されました。なぜなら、手がかりが極めて少なく、「越後から江戸にのぼった町人」「口入れ稼業をしていた」「苗字帯刀を許されていた」「銀座や江東区周辺に広く土地家屋を入手した」ということ以外、出身地さえ明確ではなかったからです。

本来なら、はじめから調査を断念するところですが、今回調査をすることに決めたのは、山田太郎氏やご親戚の方が、熱心に先祖調べに取り組んでいたことがあげられます。

筆者の調査経験では、ご子孫が積極的に先祖調べに取り組んでいる家では、調査結果が導かれる傾向があるのです。

山田家の現地調査は、山田氏の分布が集中する上越地方から始め、中越地方に移って行きましたが、新潟県は予想以上に広く、限られた期間で回るのは容易ではありませんでした。また、全ての家を調べられたわけでもなく、分布の多い地域に絞って調査を行いましたので、調べ残しがある可能性はあります。

ひと通り調査した結果、当家と繋がる可能性がある旧家は、上越市頸城区上増田の山田保の家以外には残りませんでした。ただ、証拠資料があるわけではなく、実際に繋がるか否かは五分と五分の確率です。

山田保は、幕末の激動期にあって、優れた先見性をもった不屈の事業家でした。

本調査の折り、「山田光祐と家族のあゆみ」というアルバムをお借りしました。最初のページを開くと、そこに公認会計士加賀光紀先生の山田光祐様へのメッセージが載せられていました。そこには、五年、十年先を見据えた『長い物差し』、目先の損得にとらわれない『慎重さ』、すばらしい『バランス感覚』、『強い信念』と『不屈の忍耐力』、そして『豪胆さ』などの人物評が書かれていました。

そして、その評価は山田保にも、そのままあてはまるものであり、どちらの家風も似たものがあるように感じました。

山田保の故郷、上増田新田から程近い頸城郡津有村（上越市下池部）からは、明治時代の官僚で「日本近代郵便の父」といわれた前島密も輩出されています。密は、漢字御廃止之議を将軍徳川慶喜に提出したり、京都から江戸へ遷都を主張したり、日本の近代化に貢献したことで知られています。越後高田藩からは、そのような先見性のある人が輩出される気風があるのかも知れません。

今後も山田家が、先祖の志を受け継ぎ、豊富な学識を持ち、公共に尽くし、時代の先駆者であることを確信するものです。

調査地一覧

新潟県　中越地方

十日町市　中条乙地区
三条市　袋・西鱈田・長嶺・月岡・塚野目・上保内地区
三条市立図書館
燕市　花見地区
燕市立図書館
五泉市　牧地区
新津市　梅ノ木地区
新潟市　板井・江口地区
新潟県立図書館
新発田市　真中地区

新潟県　上越地方

上越市　頸城区上増田・百間町・宮本地区
日根津地区　成巌寺
上越市立高田図書館頸城分館
中郷区岡沢新田・岡沢本田地区
仲町・川原町・五智地区　五智国分寺
上越市立高田図書館

上越市立高田図書館

妙高市
美守・東雲町・中町・白山町・志・東志地区
妙高市図書館
田切・田口・杉野沢地区
妙高市図書館妙高高原図書室

長野県

長野市　北尾張部地区
長野県立図書館

長野県立図書館

中野市　江部・笠原地区
松本市　山田下山田　山田神社
松本市教育委員会　文化財課
松本市立中央図書館

東京都

中央区　中央区立京橋図書館　地域資料室
中央区立日本橋図書館
港区　東京都立中央図書館　人文科学室
千代田区　国立国会図書館本館　人文総合情報室
台東区　東上野　上野山称行寺
元浅草　浅草山明成寺
青山霊園

調査協力

―敬称略―

称行寺　佐々木厳乗　一一〇‐〇〇一五　東京都台東区東上野六‐一七‐一五　TEL〇三‐三九九九‐一二三四
明成寺　今川宗浄　一一一‐〇〇四一　東京都台東区元浅草二‐一〇‐一七　TEL〇三‐三九九九‐五六七八
浄会寺　佐藤親善　九四二‐〇一七二　新潟県上越市頸城区宮本一二三　TEL〇二五‐五〇〇‐二二二二
成巌寺　九四二‐〇二一六　新潟県上越市頸城区日根津四五六
成願寺　渡辺宗全　九四二‐〇二〇三　新潟県上越市頸城区上増田八八八
上越市頸城区希望館　九四二‐〇一二七　新潟県上越市頸城区百間町七一六
松本市教育委員会文化財課　三九〇‐八六二〇　長野県松本市丸の内三‐七　TEL〇二五‐五三〇‐二三六〇
山田保彰　九四二‐〇二〇三　新潟県上越市頸城区上増田九九九九　TEL〇二六三‐三四‐三〇〇〇
川田恭子　九四三‐〇八三二　新潟県上越市本町六‐八八八八
川田顕五　三八三‐〇〇四五　長野県中野市江部七七
山田賢一　一七六‐〇〇〇四　東京都練馬区小竹町五‐五‐五
山田善朗　一〇四‐〇〇六一　東京都中央区銀座八‐八‐八八
山田知子　一三五‐〇〇〇四　東京都江東区森下七‐七
山下美子　二二三‐〇〇六二　神奈川県横浜市港北区日吉本町六‐六六六

付録

上越の快男児山田保

つい最近、久しぶりである時代劇の映画を見た。いつものことながら、史実などは頓着なく、ただ観衆の興味本位の映画であることは覚悟の上であるが、驚いたことに、将軍吉宗が老中以下の幕閣を集めて会議をしている場面に、将軍の後方の床の間には、西郷南州の「幾度嘗辛酸志堅…」という七言絶句の軸物がかかっていた。いくら映画でも将軍吉宗の時代に西郷隆盛が飛び出るのではヒド過ぎると、腹をかかえた。

その夜、交通史研究のため、「直江津町史」を開いてまた驚いた。二四〇頁に荒川橋位置変更の問題について

福永弥平、川合直次及び明治村山田保等の努力によって明治三十五年に今の新橋区通りの現位置に決定された。

と記している。福永、川合の両氏はよいとして、治村（現頸城村）の山田保は明治十六年六月十七日に死んだ人で、（五智国分寺山田保石碑、山田氏系図）、当時すでにこの世の人ではない。なるほど山田保は、あとで述べるように直江津荒川橋架橋の大功労者には相違ないが、それは明治初年のことである。

映画や小説の年代の誤りは笑って過すことができるが、史実の正確を期する「直江津町史」はこれを黙殺することはできない。ことのついでに山田保の人物について述べてみよう。

山田保石碑　－五智国分寺－

山田保は上越における幕末、明治の快男児である。彼は往生ぎわに、「おれが死んだら日根津（現頸城村）の成厳寺境内の山の上に葬り、墓を直江津の方向に向けて建てよ。おれは墓場ノ蔭からつねに直江津町を見おろし、長く港の繁栄する日を待っている。」といって死んだ。彼の遺言通り墓は成厳寺の裏山に建てられた。彼が死んで八十年後の今日、漸く直江津も近代工業都市として面目を改め、さらに国費による港の大修築工事も着々と進んでいる。工事が完成すれば一万五千トン級の汽船が数隻も港に並ぶという。やがて保の霊の浮ぶ港の繁栄も近い将来のうちに実現するであろう。

彼は天保四年（一八三三）七月二十五日、上増田新田（現頸城村）山田源平の長男として生れた。幼名を藤四郎といったが、のち保と改めた。この山田家は高田藩松平光長の時代に、中谷内、大潟両新田開発者平石彦左衛門に協力した旧家で、のち大肝煎を勤めた素封家である。彼の外祖父金四郎は、本家を援け、高田藩触元大肝煎となり、幕末窮乏の高田藩のため尽力した。また学問を好み、徹斉と号して文筆をよくし、良寛とも親しかった文化人であった。

保は身長五尺に足らない小男であったが、剛胆で敏活な性格であった。若い頃、高田藩の儒者東条琴台に学び、剣道は同藩の仁木金吾について免許を受けた。琴台は保の性格を見抜いて「この子は高田藩内では、じゆうぶん手足を伸ばすことができない。都会へ出して全能を発揮させたい。」と早くも保の将来に嘱望する所があった。保は十四才のとき榊原侯に謁して、大肝煎見習となり、安政五年（一八五八）の暮に父源平が死んでから大肝煎となった。父の死後間もなくその後を追って母が病死したので悲歎にくれ、喉を突いて自殺しようとしたが、助けられた。その刀痕は生涯彼の咽喉から消えなかった。なおこれより先き、彼は二十三才で、東頸城郡仁上村の本山エイと結婚し、四人の男子をもうけたが、明治四年妻と死別してから、独身で通した。

慶応元年（一八六五）幕府は再度の長州征代をおこし、保は高田藩に属して従軍した。山田保の社会的活動はこれから始まった。時に彼は三十三才である。彼は高田藩中根善右衛門に従い、敵状偵察の任をおび、京坂－長州の間を往来して、藩の策戦計画に参加した。

しかし、間もなく将軍家茂が死に、幕軍の大敗北のうちに長州征伐が止み、彼は帰郷した。この戦争中に彼の感じたことは、今後世情の変遷には、どうしても長州のような農兵隊の組織が必要だということであった。

彼は同士を募り四十名をもつて守界隊という一小隊を組織し、高田の寺院を借りて宿舎にあて、毎日兵式の訓練をした。兵器や被服はもちろん、食糧に至るまで、全部保が自費で賄った。高田藩主榊原政敬（まさたか）は保の志を賞し、銃隊郷士とした。彼になおその後、高田藩領内を遊説して、諸所に農兵隊を組織し青年の士気を鼓舞した。

彼が心血を注いで訓練した守界隊の活動を求める時機が意外に早く到来した。いうまでもなく、それは明治元年（一八六八）の北越戊辰戦争である。四月幕府歩兵隊長古屋作左衛門ら浪士五〇〇人が脱走して越後へ入り、高田へ向かった時、彼は守界隊を率いて藩兵と共に、古屋らを討とうとしたが、許されず高田藩の手で川浦で追撃した。

続いて閏四月二十一日、官軍の総督高倉永祐、参謀山県狂介、黒田了介ら高田で軍議を決し、薩長の藩兵に高田藩の兵を加えて、海道、山道二軍に分かれて、長岡へ向がつて進軍した。守界隊も高田藩に加わって

従軍した。この間を往復して高田藩のために活躍した。この活躍によって彼は中央の官界に認められることができた。

戦争がすんで平和になったので、彼は守界隊を解散して、隊員を全部帰農させた。炯眼なる彼は戦後の新しい日本の急務は、教育を盛んにし、産業を興し、大いに貿易を振興することにあると考えた。彼は単なるお家大事の古風な農村の富豪地主ではなかった。

戊辰戦争の会津落城後、同藩士が高田藩に多く預けられた。その中に儒者として令名高い南摩羽峰あることを彼は見逃さなかった。彼は早速横曾根村（現直江津市）の大滝米峰に命じて、資金を出し米峰の家を正心学舎と命名して塾舎とし、南摩羽峰を招聘して郷党の子弟を多く就学させた。

大滝米峰は文久年閣、保の父叉平が高田藩の堀越円斎を自宅に招いて塾を開いたとき、塾生として学んだ入で、米峰の人物を見込んで彼が長崎に遊学させ、名医と謳われた男である。

郷党の子弟教育のことは、すべて南摩羽峰にまかせ、保は柏崎の勤王家星野藤兵衛と手をたずさえて京都へ下った、彼は朝野の名士を訪ねて、海外貿易の振興は目下の急務であり富国の基であると説いた。また太政官の官人と交渉して、貿易資金七十万両拝借の許可を得、二十万両を携えて帰国した。

野人山田保の貿易事業は、いよいよこれから始まるのである。この新事業には親戚の高田の倉石貞助（画家乾山の長男）、黒岩（現柿崎町黒岩）の星野多仲らが加わったが、果して成功したか？

結果を先きにいうならば、彼の事業は残念ながら、どれもこれも失敗に終った。

彼は最初生糸の外国貿易をはかり、会津落城直後、信越、米沢、秋田地方の生糸を買集めて、構浜へ送ろうとして、人を雇って奔走させた。しかるに時機すでに遅く、集まったのはわずかに飛弾（岐阜県）の劣等品「ソダイ」だけで、輸出不可能のものばかりであった。そのため徒らに資金を空費しただけで、完全に彼の雄図は水泡に帰した。

ついで彼は東北地方に石炭の採堀を試みたが、これもまた失敗し多額の資金を失った。

その頃、彼は高田藩に建議して、汽船を購入し海陸交通の便を開き、産業を開発して藩庫の増大をはかったが、保守的な藩吏には彼の意中を知ることができなかった。その後廃藩に際し、高田藩は表高十五万石をもちながら、「小藩」として取扱われ、藩士らが家禄返納に多大の損失を蒙った。その原因には藩が汽船をもたなかったことも挙げられる。ここにも彼の先見の明を認めなければならないと思う。

高田藩に汽船購入の建議を容れられなかった彼は、自ら航海事業を経営しようと決心した。翌明治二年一月上京して、横浜へ行き、外人居留

地二十九番舘米人ウィリアム氏と交渉し、米国汽船二艘借入を申込んだ。しかしウ氏は山田保個人名義では、その傭船を受付けなかったので、彼はさっそく東京神田小川町の高田藩上屋敷の藩主榊原政敬を訪ね、その旨を陳述した。藩主も彼の志を諒として、「高田、新発田両藩士の江戸邸引払い荷物運送の請負をする。」ということで承諾した。彼は喜んで再びウ氏のもとへ行き、高田藩名義をもって傭船契約を結んだ。

四月上旬、高田、新発田両藩士の江戸屋敷引揚げの荷物を積んだ二艘の汽船が横浜を解纜して、下旬ちかく直江津港に姿を現わした。これが直江津へ外国船が入港した初めである。黒船を見ようと人びとが大勢集さった。

高田藩士の江戸屋敷引揚げの荷物輸送の目的は保の活動によって迅速に安全に、且つ低廉な運賃で行われ、一おう成功した。しかし保の目的は他にあった。当時保は、借入金の返済方法について苦心していたのである。ウ氏から米船二艘をチャーターしたのも、東北地方の米産地で安い米を買い集め、これを東京へ運漕すれば、少くとも当時の米価からして、二、三倍にも売ることができる筈であったから、その収益を目あてにしていたのであった。保はそのために傭船契約の締結と同時に、人を派遣して越後、出羽地方の各藩や、米商人の保有米買入れの手段を講じておいた。

直江津で荷物の陸揚げを終了した保に、直ちに高田藩の蔵米三、〇〇〇俵の船積をはじめた。

しかるに、突如として保には思わぬ大障害に直面してしまった。それは、直江津の廻船問屋をはじめ、米商人らは、高田藩に対し保の蔵米船積停止の請願を起したことである。即ち移出米の「津止め」といって、江戸時代の凶作の年には、しばしば行われたことである。

越後では前年の凶作と北越戊辰戦争により米価騰貴と極度の米不足を来たしていたからである。それ以上に、全国的な「世直し」運動の影響により、越後でも各地に騒動が頻発していたのである。

山田保ほどの人物が、この世情を識らなかったのではない。要するに彼の貿易執心、という企業熱によって、ここまで追込まれたものであろう。

保はこの情勢をみて、やむなく新潟へ廻航し、契約しておいた商人米を積込む予定であったが、新潟でも既に水原の越後府から、厳しく米穀の「津止め」が発令されていた。保は汽船を港に碇泊させておき、直ちに馬を走らせて越後府へ出頭し、かねて用意していた某宮家に対する納米積取命令書を添附して、「津止め」解禁を願ったが、越後府判事前原一誠は「宮家へは越後府から弁明する」といって、断乎として許さなかった。

ここにおいて、保は万事窮した。しかし偉丈夫山田保は、不屈不撓、自ら善後策を講じ、停船料一日三〇〇ドルで米船を港につなぎ米の代品として越後縮を買集めのために、東奔西走しているうちに徒らに日数を経過してしまった。米船は見込みなしとみてか、保に無断で新潟を出帆し、横浜へ去った。もはや保には施す策もなかった。

保は新潟で空しく米商人らと、売買契約不履行の談判をしているうちに、翌年の春そうそう、横浜の船主ウィリアム氏から、傭船違約の損害金七、三〇〇ドル賠償に関する訴訟を榊原藩へ提起された。藩は保に藩名を貸して傭船契約を締結させた責任上、やむなくこれを弁償し、保に急遽上京し出頭を命じた。

山田家では驚いて親類会議を開き、新潟から保を呼戻し、保を狂人として一室へ幽閉し、協議の上、親類代表二人（山田太平・金子喜文治）をあげて上京させ、榊原藩邸へ伺わせた。

親類代表者らは保の失敗を詫び、藩に迷惑のかからないように、保の家財整理金七、〇〇〇両と不足分は親類で補償することとし、藩に対する責任を負った。藩主榊原政敬は山田家累代の功績と保の忠誠をみとめて、金一、〇〇〇両を見舞金として贈った。二人の代表が帰国し、藩邸に対する面目も立ったので、漸く保の幽閉が解かれた。

新潟の米商人らは、保が新潟を去った後、米の買取契約不履行で山田家に対し違約金八〇万両の損害賠償訴訟を越後府へ提起した。幸に越後府は保の心情をよく洞察し、不可抗力として、この訴訟を却下したので、保はこの再度の難関を切抜けることができた。

こうした山田家の家運凋落のドン底に、翌明治四年八月四日、保の妻エイは病んで淋しく死んでいった。保は父祖伝来の家財を失い慣れない事業のためとはいいながら、無謀の冒険家として、世間の冷評悪罵のもとに、無縁孤立、しばらくは独りわびしく孤城落日の思いを続けざるを得なかった。

しかし四十六才の壮年山田保はここで空しく世捨て人の仲間に入るような男ではない。あくまでも気概のある社会人として、社会の進歩発展のため、闘志を失わなかった。

この頃、直江津で荒川橋架橋の問題があった。もとこの荒川（旧名関川）には、天正の頃、応化橋を失って以来、江戸時代を通じて高田藩は、藩の経済政策のため、直江津を北国街道、奥州街道から孤立させ、通行者には必ず高田城下町を迂回させる方針によって、荒川には架橋を許さなかった。

高田へ廻らず、郷津から密かに直江津を通り抜け、川船で荒川を越え、黒井宿で宿役人に咎められ、高田藩に訴えられて、ひどい目にあった酒田藩の御用達佐々木三郎兵衛の例さえあった。それは文政八年（一八二五）のことであるが、旅人にはまったく煩わしい交通規則であった。幕末に至って、異国船警備や、高田藩の廻米藩庫の災害防備を理由として、

天保十五年（一八四四年この年直江津大火により藩庫が全焼した）以来、再三荒川の架橋請願が行われ、特に安政二年（一八五五）頸城郡上野田村（現高田市）の庄屋勘兵衛ら数十ケ村の請願があってさえ、高田藩はこれを許さなかった。

こうして架橋問題は江戸時代から、明治へ持越された。当時頸城郡第四十五区今町市長福永弥平らは、明治維新そうそうのことであり、町民の負担で、架橋することは多額の費用を要し、町民には過重になることを恐れていた。今町は直江津の通称で江戸時代は町役人の長を大肝煎といい、維新後、肝煎の役名を変えて、一時市長といった。

山田保は米国船によって、高田藩江戸屋敷の引換荷物を直江津へ廻漕した頃から、交通上どうしても荒川の架橋を心要とすることを考えていた。明治四年地元直江津にその声があがった。保は自ら乗り出し福永市長を助け、家財整理後の苦しい家計を顧みず、保の山林から杉材三〇〇本を無償で供出した。かくて翌五年夏、荒川の架橋工事が開始され、六年の春、町民待望の橋が完成した。保は喜んで自らこの橋を「荒川大橋」と名づけた、思えば保は頸城郡第一の大橋という誇りを示したものであろう。用材は山田家二〇〇年の由緒ある記念物であり、保でなければできないことであると、世人を驚嘆させた。保の炯眼によって、新しい時代の先駆として、交通革命がはなばなしく行なわれたのである。五智国分寺境内の山田保彰徳碑は今日でも荒川橋の橋畔に移すことに意義を感ずる者はないだろうか？殊に直江津港の繁栄を祈りつつ死んだ保のためにも。

現在の荒川大橋　- 上越市川原町 -

明治六年（一八七三）政府は地租改正条令を定めて、全国一億三千余筆の土地につき地租改正を断行した。その目的は従来の収護高基準を代えて、土地の価格（地価）に応じて課税し、年貢という物納を廃して金納とし、地租は地価の百分の三を定率とし、豊凶によって税率を増減せず、定額税収とするようにしたことは周知の通りである。なお地租改正は大化改新以来の農村の大変革であり、これを遂行するために県から検査官が出張し厳重な監視のもとに、各村の庄屋組頭を中心に数名の委員を選び、小区からも戸長が地租改正掛として指揮した。作業はまず、土地の丈量から始められたが、地価を決定するまでは、種々の困難があった。保は地租改正掛として上増田、上泉新田、大潟新田の三ケ村の調査を命ぜられた。その時は明治七年も暮に近い頃で、保は翌年春、雪融けを待って仕事に着手した。保は地主の家に生まれ、土地については詳しく、頭脳明晰である上に、計算が巧みであったので、仕事がぐんぐん

捗り、二年間に担当区域の丈量を終え、地価を算定し完全に地租改正の実をあげた。

他村では、どうしてよいか手も下さないうちに、保は立派に地租改正を完成したので、県は保を指導官に任用しようとしたが、保は役人になることを喜ばずこれを受けなかった。ただ家にあって、教を乞いに来る者には懇切に指導したので、一時門前市をなしたという。

保は貿易事業に不覚の大失敗をして以来、郷里を離れず、専ら農村開先のために活躍しようとした。直江津の荒川大橋の架橋もその第一歩であった。

明治十二年（一八七九）、行政区画の改革によって、大区、小区制が廃され郡制が施かれたが、保は初代中頸城郡長渡部健蔵を動かして、農業技術指導のため、大目本農会高田支部を高田に設けた。

農村各地の有力者を集め、車門家を招いて、時々講習会を開いた。これが現今の農業協同組合の先駆をなしたことは、いうまでもない。

また当時、保は農事の改良のため東京麻布の学農舎々長津田進を顧問として、指導を受け、津田縄の使用、落花生、玉葱、牡丹菜など新作物の栽培を試み、信州から林檎を移植した。なお明治九年頃から砂糖の研究をはじめ、学農舎から支郡蘆、粟を取寄せて栽培に苦心を積み、十二年十月横須賀から砂糖製造技師大石佐平と、学農舎から磯村貞治を招聘して、砂糖の工業的製造に成功し、精製糖二、〇〇〇斤を得た。

翌十三年政府は産業奨励のため、木綿と砂糖の共進会を大阪に開いた。新潟県から出品する者がなく、独り保は進んで砂糖を出品した。砂糖は暖かい南国の産物とばかり思っていた観衆の眼を驚かし、内務卿松方正義の褒賞を授与された。

保は大阪の共進会に自信を得て、帰国後直ちに有志を募り、製糖会社を組織して北産社と名づけ、いよいよ製糖工業化を図った。

保はまず、広大な自宅の屋敷内に間口十四間、奥行四間の工場を建て、更に頸城郡内に十ケ所の分工場を設けて、蘆粟糖の精製を開始した。このため。金一、二〇〇円を投じて東京三田農具製作所から洋式の圧搾機三台を購入してすえ付け大阪から製造用大釜数個を購入して各工場に装置した。また横須賀から大石佐平によって、七人の熟練職工を雇い入れて盛んに製造し、年間二万貫の砂糖を精製することができた。

明治十四年六月、東京に第二回勧業博覧会が開催された。この時も保は北産社の製品を出品して、総裁能久親王の褒状を授与された。保は博覧会に出場し、熱心に他県の出品につき、品種、栽培法、精製法などを研究し、大いに新知識を得、二十余の新品種を手に入れて帰国した。

保が持帰った品種のうち、最も優秀な琥珀を選び、翌年その栽培から研究をはじめ、着々成果を収め、いよいよ明るい前途を迎えたが、未だその研究中に保は病んで倒れ、後続の研究者もなく、北産社は解散し、保の雄図は空しく水泡に帰した。

保は砂糖製造に従事していながら、農村の人口調節について深く考え、北海道開拓を志し、二、三男の移民を渡部郡長に進言したが北海道移民は高田藩士族の授産となって、別の形で実現した。

保は風采のあがらない小男でこそあったが、才気喚発、溌剌たる活動力に溢れた快男児であった。不幸にして、事志と異なり、すること為すこと失敗に終り、ついに家産を傾けたが、なお屈することなく、新事業を計画し片ときも休まず努力した。彼の理想とする所は生まれ出る新時代の日本は、諸外国と貿易により発展することであり自らも商取引を目的とする産業の開発に努めた。

郷土に土着する決意をした保は、直江津の港に外国船を浮べ、大商業都市直江津の発展が生涯の念願であった。

明治十六年（一八八三）、越後の自由民権運動の大弾圧が惹起された高田事件に悲憤の涙をおさえながら、六月十七日脳膜炎をわずらい、波瀾に富んだ五十年の生涯を閉じた。

年なみの、よるとも見えず
いつのまに
五十路の春も、こぎ渡るかな

と辞世一首を名残として成仏した。法名を定基院釈秀順居士という。

―渡辺慶一著―　（頸城文化17号から抜粋）

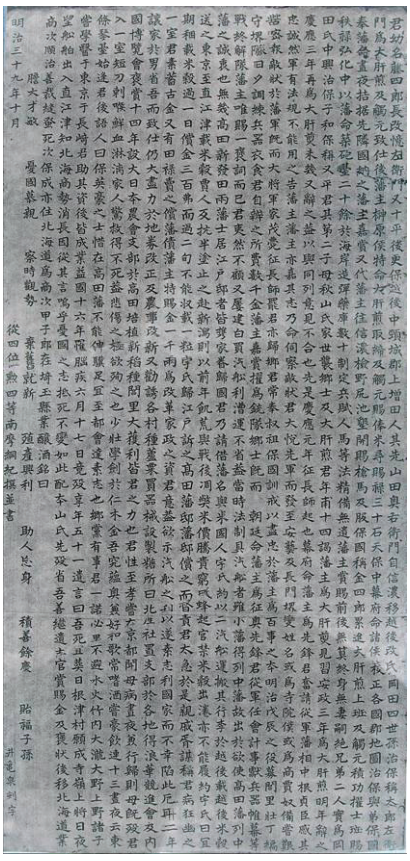
山田君碑　―五智国分寺―

君幼名藤四郎長改憶左衛門源十平後更保越後中頸城郡上増田人其先川田奥右衛門自信濃移越後改氏山田四世孫治保稱太郎左衛門爲大肝煎及觸元致仕後藩主榊原侯特命大肝煎取締及觸元賜俸米尋賜禄三十石天保中幕府命諸侯校正各國郡地圖治保與弟保國奉藩命晝夜拮据先隣國納之藩主嘉賞又代藩主往信濃檢野尻池墾開賜槍馬及服保國稱金四郎累進大肝煎上班及觸元積功擢士班賜秩禄弘化中以藩命築砲臺二十餘於海岸造彈藥庫數十制定兵賦人馬等法精備遺藩主賞賜前後無算終身無妻嗣絶兄弟二人實爲山田氏中興治保子和保稱源平君其第二子母秋山氏家世襲鄉士及大肝煎君年甫十四謁藩主爲大肝煎見習安政三年爲大肝煎明年辭之慶應三年再爲大肝煎未幾又辭之蓋以與同列意見不合也先是慶應元年征長師起也幕府命藩主爲先鋒君奮請從軍藩相中根貞臣感其忠誠然軍有法規不能用之告藩主藩主亦嘉其志乃命伺察敵狀君大悦先軍而發至安藝及長門堺變姓名或爲寺院僕或爲商賣奴備嘗艱苦密報敵狀於藩軍既而大将軍家茂薨征長師罷君亦歸鄉君常奉叔祖保國訓戒以盡忠於藩主爲百事之本明治戊辰之役募閭里壯丁編守堺隊日夕調練兵器衣食君自辦之所費數千金藩主嘉賞擢爲銃隊鄉士既而　朝廷命藩主爲征奥先鋒君從軍任會計事獻兵器帷幕等戰終解隊藩主唯賜一褒詞而已君夷然不顧又屢建白買汽

舩利漕運不省葢當時法制具汽舩者雖小藩得列中藩故出於欲使髙田藩列中藩之誠衷也無幾髙田新發田兩藩士居江戸邸者皆携家眷歸國君乃請借藩名與米國人宇氏約以二汽舩運搬其行李於越後戴越後米穀送之東京至直江津戴米穀賈人反抗半塗止之赴新潟則以前年飢荒與戰後凋弊米價騰貴窮民蜂起宮禁米穀出港亦不能履約宇氏曰亘期稠戴米穀過一日償金三百弗而過二旬不能収戴一粒宇氏歸江戸訴之髙田藩邸藩邸償之而督責君太急於是親戚胥謀稱君病狂幽之一室君素蓄古金又有田禄賣之償藩債藩主特賜金一千兩爲改革家政之資君意葢欲示汽舩之利以遂素志利國家而不幸陷此厄耳二年讓家於男省吾而到仕仍大盡力於地券改正及農事改新又勸誘各村種蘆粟買器械設製糖所曰北産社置支部於各地特浪華競進會及内國博覧會褒賞十四年設大日本農會支部於高田培植新稻種閭里大獲利皆君之力也君性至孝嘗在京都聞母病晝夜兼行歸則母既歿君入一室短刀刺喉鮮血淋滿家人驚救得不死葢悲傷之極欲殉之也少壯學劍於仁木金吾究蘊奥兼好和歌常嗜酒嘗豪飲連十三晝夜云東條臺始逢君後語人曰保英豪之士惜在高田藩不能伸驥足亘至都會達素志也鄉黨有事君一諾必果不避水火竹内大瀧大野上野諸子嘗學醫于東京于長﨑君助其資後皆成業益國十六年罹腦疾六月十七日竟歿享年五十一遺言曰吾死亘葬日根津村成巖寺嶺上將日夜望舩舶出入直江津知北海商勢消長因從其言嗚乎憂國之志抵死不變如此配本山氏先歿省吾善繼遺志官賞賜金及褒状後移北海道業商次順治善裁縫發死次保成亦住北海道爲商次甲子郎在埼玉縣業醸酒銘曰

膽大才敏　憂國慕親　察時觀勢　棄舊就新
殖産興利　助人忘身　積善餘慶　貽福子孫

明治三十九年十月　從四位勳四等南摩綱紀撰並書　井亀泉刻字



参考文献リスト

姓氏歴史人物大辞典　新潟／長野県		角川書店
長野県歴史人物大事典	赤羽篤ほか著	郷土出版社
越佐人物誌	牧田利平編	野島出版
越佐人物誌名家系譜	牧田利平編	野島出版
越佐人名辞書	村島靖雄編	越佐人名辞書刊行会
新潟県人物百年史頸城編	新潟県上越人物史研究会編	東京法令出版
山田保　　明治四十一年	栗原惣次郎編	
頸城文化　十七号	上越郷土研究会編	国書刊行会
頸城村史　通史／資料編	頸城村史編さん委員会編	頸城村
訂正越後頸城郡誌稿　下巻	越後頸城郡誌稿刊行会編	豊島書房
上越市史　通史編	上越市史編さん委員会編	上越市
史料集・高田の家臣団	上越市史専門委員会近世史部会編	上越市
山田地区郷土史資料集	松本市山田公民館編	松本市山田公民館
松本市史　第二巻　歴史編	松本市編	松本市
高殿地区（上平寺南館跡）　京極氏家臣団屋敷跡	伊吹町教育委員会	伊吹町
角川日本地名大辞典　長野／新潟県／東京都		角川書店